

修士論文(要旨)  
2008年7月

通所介護事業所職員の精神的健康に関する研究

指導 新野直明 教授

国際学研究科  
老年学専攻  
20641612  
関口俊夫

## 目 次

I 緒 言	
1. 研究の背景 (問題意識)	1
(1) 要介護高齢者人口の急増	1
(2) 要支援・要介護利用者の課題	1
(3) 高齢者を支える介護職員の現状	1
(4) 介護職員の精神的健康の実態	2
(5) 介護職員のストレスとバーンアウト	3
2. 先行研究の到達点と課題	4
3. 研究の目的	5
II 方 法	
1. 調査対象	5
(1) 中野区保健福祉の現状	
(2) 中野区介護保険施設の現況	
2. 調査方法	6
3. 調査実施	6
4. 調査項目	6
(1) 個人属性	6
(2) 評価尺度	6
① 精神健康調査票短縮版 (日本語版 GHQ28)	
② 「バーンアウト(燃えつき症候群) 尺度」 (日本語版 MBI)	
③ 「老人介護スタッフのストレッサー評価尺度」	
5. 分析方法	8
III 結 果	8
(1) 個人属性	
(2) 通所介護事業所職員の精神的健康の検討結果	
IV 考 察	18
(1) 個人属性からの考察	
(2) 日本語版 GHQ28	
(3) 日本語版 MBI	
(4) 老人介護スタッフのストレッサー評価尺度	
V まとめ	20
謝辞	
引用・参考文献	
付 録	
(1) 質問紙	
(2) 日本語版(GHQ28)	
(3) 日本語版 MBI	
(4) 老人介護スタッフのストレッサー評価尺度	

## I 緒言

### 1. 研究の背景（問題意識）

#### (1) 要介護高齢者人口の急増

我が国の高齢化率（65歳以上の高齢者人口が総人口に占める割合）は、現在は21.5%であるが、2015年には26.9%（中位推計）に増加すると予測され、21%を超えた「超高齢社会」にすでに突入している。また、これらの高齢化に伴い介護を要する高齢者も急増し、寝たきり、認知症及び虚弱を合わせた要支援・要介護高齢者数等は、2025年には、520万人になると推定されている。

#### 2. 先行研究の到達点と課題

近年、医療、教育、福祉などの対人援助サービス従事者の増大により、精神面の健康状態とその関連要因に関する研究も一定の蓄積がされてきている。これまでの研究では、介護保険三施設の施設介護職員の精神的健康におけるストレスに関する研究が多く、その中にはバーンアウトに関するものもすくなくない。また、居宅サービス事業では訪問介護員（ホームヘルパー）や訪問看護の研究も多い。施設介護職員における抑うつやバーンアウトを含むストレスについては、それぞれ研究の蓄積があるが、指定通所介護事業所職員の精神的健康について着目した研究は見あたらない。

#### 3. 研究の目的

本研究では、介護老人福祉施設の研究が多い中で、同様の高齢者介護を担っている通所介護事業所の職員の精神的健康に関する研究はみあたらない。東京都の福祉事業者認定数においても介護保険三施設より通所介護事業所は圧倒的に多い。その通所介護事業所の職員を中心に仕事上で起こる抑うつ、精神的健康、燃え尽き症候群について「精神健康調査票（日本語版 GHQ28）」、「バーンアウト（日本語版 MBI）」、「老人介護スタッフのストレス評価尺度」の3つの尺度を用いて調査し、これらの結果を通所介護職員の対照群である施設介護職員と比較し、精神的健康度に有意差があるか否かを調査することを目的とする。

## II 方法

### 1. 調査対象

東京都中野区内の指定通所介護事業所 24 施設で高齢者介護を主な業務とする介護職員（以下、「通所介護職員」とする）並びにその他の業務を主に担う職員を調査対象として、介護ストレスによる精神的健康を評価する。また、対照群として、指定介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）2 施設で高齢者介護を主な業務とする介護職員（以下、「施設介護職員」とする）を対象に同様の調査をおこなった。

なお、調査を実施する中野区における保健・福祉の概要は以下の通りである。

### 2. 調査方法

自由意志によって、回答できるように無記名自記式回答を採用し、指定通所介護事業所及び指定介護老人福祉施設を訪問して、管理者（施設長）から介護職員個人へ配布してもらい質問紙を後日直接回収するか、郵送依頼をした。対象となる通所介護事業所及び介護老人福祉施設の職員であっても、管理的立場にある者、及び専任事務職員は、調査から除いた。

### 3. 調査実施

東京都中野区にある指定通所介護事業所 24 施設と指定介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）の 2 施設で働く介護職員（常勤職員・非常勤職員・業務委託職員・派遣職員）に対して質問紙の調査を行った。実施期間は 2007 年 11 月 19 日から 12 月 3 日に調査の協力を依頼したが、各事業所業務多忙のため、再度 2008 年 1 月 7 日から 1 月 21 日に約 2 週間を目途に回収できるよう依頼した。

#### (2) 評価尺度

- ① 精神的健康調査票 (General Health Questionnaire: 日本語版 GHQ28)
- ② バーンアウト (燃えつき症候群) 尺度 (Maslach Burnout Inventory: 日本語版 MBI)
- ③ 「老人介護スタッフのストレッサー評価尺度」

### III 結果

#### (1) 個人属性

回答に欠損がなく有効回答は、通所介護事業所では 216 人 (65.3%)、介護老人福祉施設 59 人 (47.6%) であった。455 人に配布し、有効回収率 275 人 (60.4%) であった。

#### (2) 精神的健康度

##### 1) 日本語版 GHQ28

通所介護事業所の職員の得点の平均値は、両群に有意な差はなかった。性別にかかわらず通所介護職員と施設介護職員の 2 群間には有意の差はなかった。

##### 2) 日本語版 MBI

通所介護事業所の職員の得点の平均値は両群に有意な差はなかった。性別にかかわらず通所介護職員と施設介護職員の 2 群間には有意の差はなかった。

##### 3) 老人介護スタッフのストレッサー評価尺度

29 の項目の質問に対して「よくあった」と回答した人の数と割合 (%) を示した。カイ二乗検定により有意差があった項目は、以下の 9 項目であった。いずれの項目でも、介護老人福祉施設の職員に「よくあった」とした人が多かった。他の 18 項目 (介護老人福祉施設の職員の回答数に問 9、13 は除く) には有意な差はなかった。性別に分析したところ男性群で、通所介護職員と施設介護職員の間には有意の差があったのは、8 項目であった。いずれの場合も、介護老人福祉施設の職員に「よくあった」とした人が多かった。

### IV 考察

本調査では、要支援・要介護高齢者を介護する福祉介護職員の精神健康票 (日本語版 GHQ28) を使用して、通所介護事業所と介護老人福祉施設の職員を調査した結果、精神的健康度に有意の差はなかった。これらは性別に検討しても同様であった。今回の調査で、職場内の結果で有意な差はなかったが、通所介護職員は主婦が多い中で、家庭内に起因する諸々の問題を検討すれば精神的健康度に影響する可能性があると考えられる。家庭内における調査も検討が必要である。

日本語版 MBI では、通所介護職員と施設介護職員を比べても有意の差はなかった。しかし、慢性化する人材不足の中で、バーンアウト徴候が高まることが予想され、「経験年数の浅い介護職員」、「仕事量の負担感」、「上司や同僚との葛藤やコミュニケーション不足」、「教育訓練の不備」等の問題を見直しする必要性が生じてくる。特に、通所介護事業所は女性が多く、人手不足の中で仕事量が増えればバーンアウト徴候が高くなる可能性が十分に考えられる。今後、これらの原因を適切に通所介護職員に対してケアすることが必要であると考えられる。

「老人介護スタッフのストレッサー評価尺度」の調査から、通所介護職員より施設介護職員高い割合を示した項目があった。介護職員にとっては、要支援・要介護者の機能低下により、手間と時間を要し、常時観察が必要な労働である。このために介護による身体的疲労や睡眠不足、拘束感などから介護職員の心身の負担は極めて大きいと思われる。通所介護職員においても有意の差は高くはなかったが、介護現場という限定された場所の調査であったため、介護職員が関わる日常生活の中の家庭・親子関係、対人関係等の中で、何らかのストレスの影響を生じる可能性がある。今後の調査の課題として、個人属性等の影響との調査や分析も必要とされる。

## 引用・参考文献

- 1) 国立社会保障・人口問題研究所：「日本の将来推計人口」2-5. 2006.
- 2) 内閣府：「高齢社会白書—平成18年度版—」2-4. 2006.
- 3) 厚生労働省：「平成17年度介護サービス施設・事業所調査」1-9. 2005.
- 4) (財)介護労働安全センター：「—平成19年度版—介護労働の現状」19-25. 2007.
- 5) 福祉人材センター：「福祉人材の求人求職動向」3-8. 2006.
- 6) 谷口幸一, 吉田靖其: 老人福祉施設職員の介護ストレスに関する研究. ストレス科学 vol. 15 (1), 82-87. 2000.
- 7) 矢富直美, 中谷陽明, 巻田ふき: 老人介護スタッフのストレス—評価尺度の開発. 社会老年学 vol. 34, 49-59. 1991
- 8) 松本日出男, 池田聡子, 森満: 同一医療機関の医師・看護職における精神的健康度と職場のストレス要因の検討北海道公衆衛生学雑誌 vol. 15, 59-69. 2001.
- 9) 田尾雅夫: 『ヒューマンサービスの経営—超高齢社会を生き抜くために—』白桃書房. 2001.
- 10) 武井麻子: 『感情と看護—人とのかかわりを誰某とすることの意良—』医学書院. 2001.
- 11) 森本寛訓: 老人施設介護職員の心身疲労に関連する要因の検討—対処と対処効力感. 仕事の裁量度を用いて—川崎医療福祉大学大学院医療福祉学研究科臨床心理学専攻修士論文. 1999.
- 12) 佐藤美紀, 阿部恵江: 効果的なチームアプローチを考える. ターミナルケア vol. 13 (4), 257-261. 2003.
- 13) 細田満和子: 「チーム医療」とは何か—それぞれの医療従事者の視点から—保健医療社会学論集 vol. 12, 88-101. 2002.
- 14) 中川泰彬, 大坊郁夫: 日本版GHQ精神健康調査票の手引. 57-66. 1985
- 15) 川野雅資編著: 高齢社会のメンタルヘルス. 金剛出版. 155-181. 1994.
- 16) 東京都老人総合研究所: 老人ケアスタッフのストレスと心身の健康. 1997.
- 17) 新名理恵, 坂田成輝, 矢富直美, 本間昭: 心理的ストレス反応尺度の開発. 心身医学 vol. 30, 29-37. 1990.
- 18) 久保真人: 『バーンアウトの心理学—燃え尽き症候群とは—』サイエンス社. 74-86. 2004.
- 19) 久保真人, 田尾雅夫: バーンアウト, 概念と症状, 因果関係について心理学評論 vol. 34 (3), 412-431. 1991.
- 20) 越可六郎: ヒューマンケアワークの特徴. 保健の科学 vol. 37 (4) 1995.
- 21) 音山若穂, 矢富直美: 特別養護老人ホームの利用者中心の介護が介護スタッフのストレスに及ぼす影響. 社会保障研究 vol. 33 (1), 81-89. 1997.
- 22) 中谷陽明, 東條光雅: 介護負担感スケール. 東京都老人総合研究所社会部. 1989.
- 23) 厚生労働省大臣官房統計情報部: 「平成16年介護サービス施設・事業所調査」1-9. 2005.
- 24) 稲谷ふみ枝, 津田彰, 神菌紀幸, 村田伸「介護福祉施設職員の精神的健康と離職の検討」老年社会科学 vol. 27 (2), 255. 2005.
- 25) 田尾雅夫, 久保真人: 「バーンアウトの理論と実際」誠信書房. 29-37. 1996.
- 26) 長田久雄, 朝日雅也, 奥住文明, 古郷俊朗, 矢吹貴夫: 介護労働者の精神的緊張とその影響に関する研究. (財)雇用開発センター. 1999. 2000. 2001 年度報告書.
- 27) 桐野匡史, 柳 漢守, 濱口 晋, 矢島裕樹, 金 貞淑, 中嶋和夫: 介護職員に起因するストレスが施設高齢者の精神的健康に与える影響. 厚生指標 vol. 53 (6) 7-14. 2006.
- 28) 森本寛訓: 高齢者施設職員の精神的健康に関する一考察—職務遂行形態を仕事の裁量度の視点から捉えて—, 川崎医療福祉学会誌 vol. 13, 263-269. 2003.
- 29) 東野定律, 筒井澄栄, 矢嶋裕樹, 桐野匡史, 筒井孝子, 中嶋和夫: 要介護高齢者の主介護者における精神的健康. 厚生指標 vol. 53 (1), 27-31. 2006.
- 30) 小野寺敦志, 畦地良平, 志村ゆず: 高齢者介護職員のストレス—バーンアウト—. 老年社会科学 vol. 28 (4), 464-475. 2007.

- 31) 川野健治, 矢富直美, 宇良千秋, 中谷陽明, 卷田ふき: 特別養護老人職員のバーンアウトと関連するパーソナリティ特性の検討. 老年社会科学 vol. 17 (1). 11-20. 1995.
- 32) 宇良千秋, 矢富直美, 中谷陽明, 卷田ふき: 特別養護老人ホーム介護職員のストレスに対する管理者のリーダーシップと施設規模の影響, 老年社会科学 vol. 16 (2). 164-171. 1995.
- 33) (財)雇用開発センター: 介護労働者の業務内容と心身の負担感に関する研究. 2006.
- 34) 堀田千秋, 井出亘, 久保真人: ホームヘルパーの仕事・役割をめぐる諸問題, 日本労働研究機構No.153. 2003
- 35) 小松啓: ホームヘルパーの業務とストレス, 東洋大学大学院紀要 vol. 34. 187-206. 1997.
- 36) 久保真人, 田尾雅夫: 看護婦におけるバーンアウト・ストレスとバーンアウトとの関係一, 実験社会心理学研究 vol. 34 (1) 33-43. 1994.
- 37) 中野区保健福祉部介護保険課: 「中野区介護保険の運営状況」. 2005.
- 38) 中野区: 「中野区保健福祉総合推進計画 2005 (第3期介護保険事業計画)」. 2006.
- 39) 中野区保健福祉部介護保険課: 「保健福祉サービス意向調査」. 2005.
- 40) 中野区保健福祉部介護保険課: 「保健福祉に関する意識調査」. 2006.
- 41) 北西正光, 名高将浩. 看護業務従事者における腰痛の疫学的検討. 日本腰痛会誌 13-16. 1995
- 42) 岸本麻里: 老人福祉施設における介護職者の職業継続の意志に影響を与える要因の分析. 関西学院大学社会学部紀要 vol. 92. 103-114. 2002.
- 43) 豊増功次: 看護師のストレスとメンタルヘルスケア vol. 15 (1) 57-65. 2000
- 44) 森本寛訓: 看護婦の精神的健康に関する研究. 川崎医療福祉学会誌 vol. 15. 243-247. 2005.
- 45) 高良麻子: 特別養護老人ホーム職員のバーンアウトに関する研究—バーンアウトの予防を目指して—. 東京家政学院大学紀要 vol. 43. 85-92. 2003.
- 46) 矢富直美, 川野健治, 宇良千秋, 中谷陽明, 卷田ふき: 特別養護老人ホーム痴呆専用ユニットにおけるストレス. 老年社会科学 vol. 17 (1). 30-39. 1995.
- 47) 鷺見克典, 長江拓子: 看護婦の職業性ストレスに於けるワーク・コミットメントの役割—役割ストレスとバーンアウトの関係の調整要因—. 教育医学 vol. 44 (2). 477 - 489. 1998.
- 48) 佐藤ゆかり, 渋谷久美, 中嶋和夫, 香川幸次郎: 介護福祉士における離職意向と役割ストレスに関する検討. 社会福祉学 vol. 44 (1). 67-78. 2003.
- 49) 藤野好美: 社会福祉従事者のバーンアウトとストレスについての研究. 社会福祉学 vol. 42 (1). 137-149. 2001.
- 50) 畠山綾子: 介護老人保健施設で働く看護婦と介護職のストレスについて. 神奈川県立看護教育大学校. 看護教育研究集録 Vol. 27. 62-69. 2002.